

「欧州和解の象徴」 ストラスブール

フランス・ストラスブール総領事

軽部 洋

この連載では、外交の最前線「フロントライン」で活動する外交官に、現地の様子を語っていただきます。今回はドイツとの国境に位置する、歴史ある都市ストラスブールの総領事が登場します。

ストラスブールの歴史

パリからほぼ真東、距離にして488 km、TGVで約2時間30分、ドイツとの国境に位置する都市、これがストラスブールです。

このストラスブール、ひいてはこの市を州都とするアルザス州は、フランスとドイツ両国の関係のはざまで、しばしばその帰属を変えてきました。神聖ローマ帝国(ドイツ)内の司教都市・

自由都市であった同市は、1648年

のウエストファリア条約によるアルザス州のフランス領への併合決定の後、1681年に当時のフランス国王ルイ14世が入城し、フランスに併合されま

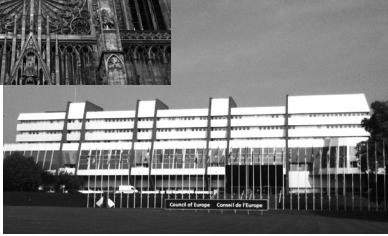
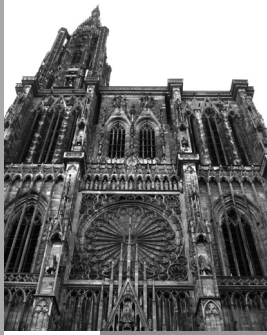
す。しかしその後も、1871年〜1918年、1940年〜1945年にドイツ領とされました。特に第1次および第2次世界大戦においては、同じ家族が敵と味方に分かれるという悲劇



かるべ ひろし

1978年東京大学卒業、外務省入省。在スリランカ大使館公使、大臣官房アジア福祉教育財団難民事業本部長を経て、2009年7月より現職。

も多数生じました。ストラスブール市中央部の共和国広場には、両腕におのおの男の子を抱いた母親の像がありま
す。東を向いた子はドイツ軍に、西を向いた子はフランス軍に徴用され、二人の子の運命を嘆き悲しんでいる母親の像との説明を受けましたが、現実にはそのような状況が起こっていたのです。
「自分たちはまずアルザス人であり、ついでフランス人」とする誇り高いアルザス人気質は、まさにこのような地理的特徴とその歴史によりはぐくまれてきたものであると強く感じられます。個人的には「フランス人のエスプリと、



新旧の歴史の象徴となる、ストラスブール大聖堂と欧州評議会。

「ドイツ人的な勤勉さと正直さを併せ持った人々」という印象ですが、褒め過ぎでしょうか。少なくとも時間を良く守ってくれるというのは、日本人に非常にしっくりくるような気がします。

「欧州評議会」の設置

第2次世界大戦後の1949年、独仏間の平和が欧州の平和のために不可欠であるとの認識に基づき、いわば和解の象徴となったストラスブールに

「欧州評議会」が設置されました。「民主主義」「人権」「法の支配」という共通の価値の実現に向けた加盟国間の協力の拡大を目的としており、現在の加盟国は、EU27カ国に西バルカン諸国、ロシア、ウクライナを始めた旧ソ連邦諸国等を含めた47カ国で、真の意味での汎欧州機関と言えましょう。主な組織には、①閣僚委員会（各加盟国の外相によって構成される意思決定機関）②議員会議 ③地方自治体会議 ④欧州人権裁判所 ⑤事務局（職員約2000人、予算規模約262億円。事務総長はノルウェー元首相でノーベル賞委員会委員長でもあるヤングラン氏）があります。日本は1996年に閣僚委員会のオブザーバーになり、わが総領事館がその任を務めています。閣僚委員会の下に各国の常駐大使によって組織される閣僚代理会合が置か

れて日常的に会合を行っています。この会合に出席していて強く感じられるのは、「民主主義」「人権」「法の支配」といった価値は、単なる概念ではなく、日常生活に密着した血が通ったものであるということ。さらに、このような価値が、一国家の主権に限られることのない加盟国共通のものとして守られなくてはならないという強い意思が存在しているということです。各国代表の議論を聞きながら、「なるほど欧州の民主主義とは、こういうものなのか」と肌で感じ、また「人権」「民主主義」「法の支配」といった価値は、人々の日常生活に根ざしたものであり、それ故にこのような不断の努力によって維持・確立されていかななくてはならないものなのであるう、との思いを強めつつ、日本とアジアの将来に考えを巡らせたりもする、今日この頃です。